

日常生活と道徳性

| | | |
|-------|-------|--------------------------|
| 企画・司会 | 首藤 敏元 | (埼玉大学教育学部) |
| 話題提供者 | 岩佐 信道 | (麗澤大学) |
| | 高木 友子 | (お茶の水女子大学文教育学部) |
| | 山下 政司 | (熊本県植木町立田底小学校・兵庫教育大学大学院) |
| | 唐澤 真弓 | (白百合女子大学文学部) |
| 指定討論者 | 明田 芳久 | (上智大学文学部) |

企画主旨

道徳性に関する心理学的研究の多くは、個人の道徳的発達を測定する手段として、またそれを高める方法として仮説的なジレンマ物語を利用してきた。この方法により、道徳性の発達理論が築かれ、道徳教育の効果的な指導法が作られてきた。しかし、個人の道徳性は日常の社会生活の中で獲得され、その質に影響を与えていることは明らかであり、現実の生活から離れて存在するものではない。道徳性に関する研究の最終的な目標は、個人の道徳性を日常生活の中で理解することである。

本シンポジウムは、個人の日常生活という観点を導入することを通して、道徳性に関する新たな研究と実践の示唆を得ることを目的として企画された。具体的には、個人の道徳判断の発達と日常の道徳的ジレンマや生き方との関係、子どもの仲間関係および大人との関係と道徳性の獲得、学校現場における子どもの自尊感情の発達と教育および日常的な道徳教育の実践、道徳と自己の関係および文化と自己の相互規定性に関する文化心理学的アプローチに関するテーマを中心に討論する。

日常の道徳性と発達段階 岩佐信道

コールバーグが、架空の道徳問題を用いて明らかにし、四半世紀にわたって検討を重ねた道徳性の発達段階は、厳密には、道徳判断に関するものであった。その慣習的レベルまでの発達段階の特徴は、罰の回避(第1段階)、自己の欲求を中心とする損得の計算と妥協(第2段階)、身近な人間関係における相手への善意と思いやり(第3段階)、社会の一員としての自覚に基づく法や秩序の尊重(第4段階)と要約することができる。

このような発達上の特徴は、判断ばかりでなく、人々の日常生活における実際の行動にも見ることができる。そこで私は、人間のトータルな道徳性

をとらえる場合にも、この発達段階を活用することができ、また、それは望ましいことと考えている。たとえば、判断面では、すでに第1段階や第2段階を卒業した大人でも、実際の行動では、相変わらず「罰の回避」や「損得の計算」で動いている場合が少なくない。かつてケネディ大統領は、その就任演説で「国が何をしてくれるか、でなく、国のために何ができるか、を問うてほしい」と呼びかけた。これは、明らかに、第2段階でなく、第4段階で考え、行動することを国民に訴えたものである。第2段階の克服は、子どもよりも大人の課題なのである。

今、私たちの目を、現実から切り離された研究の場から、日常生活へと移す時、クローズアップされるのは、むしろ大人の道徳性である。「ふつうの」子どもが、キレて、さまざまな問題を起こしている一方で、「エリート」の官僚や企業のトップの不祥事が連日のように報道されている。どちらが、より深刻な問題なのであろうか。日常生活の道徳性の研究が、今切実に求められている。子どもを対象とし、判断の領域にとどまっている場合ほど、簡単ではないかもしれないが。

大人-子ども関係と子ども-子ども関係におけるルールについての認知から見た道徳性 高木友子

大人との関係と子ども同士の関係は、子どもの道徳性の発達にどのような影響を与えるのだろうか。この話題ではルールにまつわる認知の面から検討してみたいと思う。Piaget(1932)以来、子どもは、まず、大人から絶対的規則を与えられ、同輩との相互作用の中で合理的規則についての認知が獲得されると考えられてきた。学校教育でも道徳性の発達を促すべく、特に小学校中学年以降、児童・生徒に自治・自己決定の機会を用意している。子ども-子ども関係は本当にルールについて

の合理的理解を促進させるのだろうか。

小・中学生を対象に、大人もしくは同輩との関係の中で設定されたルールについて、逸脱の重大性・判断の基準・可変性などを質問紙で尋ねた。結果、大人からルールを与えられた場合、子どもは権威に拘泥し、子ども同士でルールを決定した場合、合意や責任といった概念を用いやすいことが示された。子ども—子ども関係は、社会的概念を発達させる一方で、逸脱の重大性や可変性においては、小学生から中学生にかけて、必ずしも合理的または柔軟な対応を生起させず、むしろルールの使用態度の硬化を促す傾向が見られた。

道徳的発達において、このような結果の持つ意味と日常生活という背景について、大人の担うべき役割と子ども—子ども関係の意義について、当日論じられればと思う。

自尊感情を高める日常活動における取り組み

山下政司

勤務校においては、人権を尊重し、不合理な差別を見抜き、それを乗り越える主体的意識や実践力をもった人間を育成することを教育目標に掲げている。子どもたちの実態をみると、特に、人の気持ちを思いやり相手の立場に立って考える姿勢や、何事にも積極的・自主的に取り組む姿勢など、児童相互の仲間づくりにかかわる視点が十分には育ってきていない。その原因を考えると、今までの教育の在り方（対策教育、対応の教育）に問題があったのではないだろうか。これからはもっと基盤の部分（健全な人格形成の中核的部分ともいえる自尊感情）に注目する、そういう教育を日常的に行っていく必要があると考える。

子どもたちの自尊感情を育てていくためには、もっと個の自立をめざした教育を、そして自立した個どうしのつながりをめざした学習を展開していくことが大切である。このような学習を展開していく中で、以下に挙げるようなことに気づいたり、感じたりする子を育てていきたい。①「自分らしさ」とは何かに気づく。②「自分と友だちは違っていい。」ということに気づく③「自分は友だちとつながっている。」ことに気づく。④「クラスの中に自分の存在する場所がある。」ことに気づく。⑤「クラスの中で自分は大切に思われている。」ことに気づく。⑥「友だちを大切に思う自分がいる。」ことに気づく。⑦「自分が好きで

ある。」と感じる。このようなことを焦点化し、凝縮して学習できる場は道徳の時間であると考えられる。しかし、これらは道徳の時間のみで獲得されるものではない。教科や特別活動の学習の中で、あるいは日常活動（ここでは、授業＜教科・道徳・特活＞以外の登校から下校までのすべての学校生活での活動とする）の中においても獲得されるものである。

当日は、自尊感情実態調査とその分析および考察、今まで学校現場で実践してきた日常活動（なかよし集会・縦割り班活動・生命を大切にする活動など）について提示する。

文化と道徳

唐澤真弓

従来心理学において、道徳の研究は様々な事象や行為の善し悪しの判断基準を特定したり、あるいはそれらの基準の発達段階を理論化するという方向でなされてきた。そして、道徳とは善し悪しを判断するという認識の問題であると同時に、善く生きたり悪く生きたりすることという存在の問題でもあることを見逃してきた。道徳は、人がそれを享受しながら、また変革していくものである。人は道徳を身につけつつ、また道徳を形作っていく。道徳を身につけるとは「善いあり方」を体得することであり、これは「善いこと」とは何かという認知的能力とは別のものであるかもしれない。

本発表では、道徳的な存在の仕方の一つの要素として自己認識のあり方を取り上げる。そして、欧米における個人志向的文化においては、世界の中心としての自己の効能感を強める方向での存在様式が、また、日本を始めとする相互協調的文化においては、回りにある基準に比較して自己の欠点を見つけ、それを努力によりなくすという存在様式がそれぞれ優勢であることを指摘する。こうした自己批判的傾向を実証する研究を報告する。そして、特に日本において社会における理想像や関係性のある他者と自分を比較して自己を相対的に低く見積もることにより、自分の欠点に注目すると同時に、関係性のある他者の長所に注目し、それを自己の目標として内面化することに自己の向上を測る自己実現の形態を考察し、自他の評価における判断バイアスが「反省」をはじめとする日本文化のパターンと密接に結び付いているといった自己と文化の相互規定性の性質を議論する。